

三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

創刊号
2009.4.25

創刊に寄せて



三鷹市長

清原慶子

「三鷹市山本有三記念館」は、山本有三の業績を顕彰するために、「有三青少年文庫」を改修整備し、平成八（一九九六）年十一月三日に開館しました。記念館では、山本有三のご長男である山本有一氏のご遺志により三鷹市に寄贈していただいた資料を中心に、これまで三十七回の企画展を実施し、展示会図録などの書籍を十六冊発行するとともに、山本有三に関する講演会や朗読会などの事業を行ってきました。

平成十九年には山本有三生誕百二十年を迎え、ゆかりの品々を展示するための展示室を新たに設けるなど記念事業を実施いたしました。さらに平成二十年度より記念館を案内する「ガイドボランティア」の養成と活動支援を図り、「ガイドボランティア」の皆様にご活躍していただいています。

なお、昨年の五月からは入館料を頂戴するよういたしました。有料化の趣旨をご理解いただき、引き続き年間一万余人を超す皆様に来館していただき、開館以来延べ約三十万人の皆様に来館していただいていることに深く感謝申し上げます。

さて、昨年の九月十九日に、天皇后両陛下が当記念館を行幸啓され、庭園で手入れをする社団法人三鷹市シルバー人材センターの会員を激励され、館内で御昼食をとられたことは大変光栄なことございました。

指定文化財として保存されている建築物である、作家が多くの作品を生み出した自邸を、記念館として公開している施設は全国的にも希少です。そこで、このたび、当記念館を愛する皆様への情報提供をさらに充実させたいと願い、「館報」を創刊することといたしました。今後は、情報交流のメディアともなるように努めていきたいと考えています。

三鷹市は、作家として、文人として多大な功績を残した山本有三を顕彰しつつ、文化財である建造物の深い魅力についても、さらに多くの皆様に堪能していただけるよう、今後も努力してまいります。どうぞ、「館報」をご愛読ください。

●開催中の企画展

『日本少国民文庫』の世界と編集者たち

二〇〇九年九月三〇日（水）まで

山本有三は言論・出版の自由が著しく制限されつつあった昭和十年から十二年にかけて、先駆的な児童教養叢書『日本少国民文庫』を編纂しました。

本展では『日本少国民文庫』の世界を、それ以前に刊行された児童教養叢書と比較しながらご紹介すると共に、有三と編集者たちの活躍や受容の歴史を辿ります。

○展示構成

I 山本有三と編集者たち

II 戦前の児童教養叢書

III 読み継がれる『日本少国民文庫』

コラム 装幀と口絵・挿絵



↑ 『日本少国民文庫』全16巻
昭和10～12年 新潮社

『日本少国民文庫』
内容案内→

《特別寄稿》

次代に伝える理念

—山本有三と『日本少国民文庫』

編集者たちの熱意—

久米依子

●総力戦時代の新たな叢書

『日本少国民文庫』（新潮社）は、山本有三が優れた編集者や執筆者たちの協力を得て、昭和十（一九三五）年から二年間かけて刊行した全十六巻の児童向け教養叢書である。刊行開始の半年後に有三は三鷹に転居しているので、叢書の大半の巻が三鷹から発信されたことになる。

当時の有三は四十代の終わり、「女の一生」（一九三二～三三）「真実一路」（一九三五～三六）などの連載小説により、作家としての実力も人気も絶頂期を迎えていた。その重要な時期に、あえて郊外の三鷹に転居し、児童向け叢書の編集に着手したのである。というのも昭和八（一九三三）年、「女の一生」が反軍的だという理由で憲兵隊から干渉を受け、小説の執筆すらむずかしくなってきたという事情（吉野源三郎）があった。ただし『日本少国民文庫』は単に、総力戦に向かう緊迫した情勢をやり過ごすための便宜的な企画ではない。「軍国主義的風潮から少年たちを守り、時勢に毒されないヒューマ

ニステイックな思想や感情をつちかう」（吉野）という目標の下、有三と編集者たちが心血を注いで取り組んだ仕事であり、時代への密かな抵抗でもあった。偏狭なナショナリズムを排し、次代を担う少年少女に本来に必要な教養を伝えたい、という熱意を込めて刊行されたのである。

結果的にこの叢書は何度も復刊され、戦後の子どもたちにも長く影響を与え続けた。美智子皇后も小学校時代に疎開先で愛読し、収録作によって人間の喜びと悲しみに深く触れたと、国際児童図書評議会の講演（一九九八）で思い出を語っている。戦禍の迫る危機の時代の中、有三たちが守り抜いた理念は、確実に次の世代に受け継がれたのである。

●「人類の進歩」という理念

『日本少国民文庫』以前にも児童向けの教養叢書はあったが、それらに比べこの叢書の特色は、第一に気鋭の若い編集・執筆者を起用し重用したこと、そして国家単位ではなく「人類の進歩」という枠組みで全体を統一したことにある。物理学者石原純（一八八一～一九四七）や劇作家岸田國士（一八九〇～一九五四）など、既に有名だった専門家も協力したが、全体の方針の検討の中心となったのは、有三が信頼した若手の学者や編集者たちだった。有三と彼らは協議を重ね、世界の

歴史や科学や文学の解説に、「人類」共通の文化という新たな観点を導入し、ヒューマニズムを尊重する思想を盛り込んだ。

例えば第一回配本の『心に太陽を持つて』（第十二巻）は、世界中の胸を打つ実話を集めた上で、外国と日本の区別をつけずに並べている。また叢書のコンセプトをそのまま示したような表題の『人類の進歩につくした人々』（第八巻）では、「人類」全体の偉人としてリンカーン、キュリー夫人、ベートーヴェンの生涯を紹介した。特に編集者吉野源三郎が執筆したリンカーン伝「正義を求めて」は、「不正に苦しむ者のない世の中」をめざして奴隷制度廃止に邁進したリンカーンの奮闘を、感動的に描ききっている。

そして文学作品については『日本名作選』（第十六巻）が一冊であるのに対し、『世界名作選』（第十四・十五巻）には二冊をあて、新たな翻訳で世界の名作を収録した。いずれの巻にも、読者の子どもたちに国際的な視野を持たせたいという強い願いが感じられる。さらにこの叢書は、女性の活躍をクローズアップした点でも注目される。『心に太陽を持つて』には、十九世紀アメリカで婦人解放運動を推進したエリザベス・スタントンの伝記が含まれ、『人類の進歩につくした人々』は上述のように、リンカーン、ベートーヴェンと並ぶ偉人として、母娘共にノーベル賞を受賞したキュリー夫人と娘のジョリオ夫人を

● 編集者・執筆者たちと山本有三
『日本少国民文庫』の編集主任は、戦後の岩波書店で雑誌「世界」の編集長となった吉野

取り上げた。エリザベスのエピソード中には「女も、自分の足で立ちあがらなければならぬ」という文がみられる。戦前期の日本の児童書で、このような男女平等の思想が示されたのは希有なことであり、その点でも戦後の理想を先取りしていたといえよう。



右: 第14巻『世界名作選(一)』山本有三選 昭和11年 新潮社
中: 第12巻『心に太陽を持って』山本有三著 昭和10年 新潮社
左: 同上外箱

源三郎(一八九九〜一九八一)である。吉野は東大で哲学を学んだ後、図書館などに勤めたが、左翼へのシンパ活動が治安維持法に触れ入獄した。山本有三は吉野の才を惜しんで身元引受人になり、失職中の吉野に『日本少国民文庫』の編集作業を任せただけである。この仕事で認められた吉野は岩波書店に入社し、戦後にリベラルな言論人として活躍することになる。また吉野が書いた『君たちはどう生きるか』(第五巻)は、人生の指針を説く名著としてロングセラーとなった。

他に編集作業に加わったのは、児童書に詳しい吉田甲子太郎(一八九四〜一九五七)と編集実務に長けた石井桃子(一九〇七〜二〇〇八)である。吉田は早稲田大学の学生の頃から有三に師事し、有三の創設した明治大学文芸科の教授を務めた。石井桃子は日本女子大学英文科を卒業後、菊池寛の経営する文藝春秋社で働き、菊池に見込まれ、暗殺される直前の犬養毅首相の蔵書整理も行っていた。叢書の仕事以降は、吉田は戦後の良心的児童雑誌「銀河」の編集長となり、石井は児童書の翻訳、出版、評論の分野で大きな業績をあげ、戦後の児童文学を牽引することになる。

さらに、有三と親交の深かった独文学者高橋健二(一九〇二〜一九八八)、英文学者中野好夫(一九〇三〜八五)、作家阿部知二(一九〇三〜七三)らも、編集会議に参加しつつ、

執筆に協力した。高橋訳のケストナー「点子ちゃん」とアントン、ボンゼルス「蜜蜂マーヤの冒険」といった優れた翻訳が、叢書には収録されている。

それらも含めて、有三は執筆者の文章を、子どもに分かりやすいかどうかを念頭に、厳しくチェックした。石井桃子によれば「こんなに原稿に赤(訂正)を入れられたことはないよ!」と音をあげる執筆者もいたという。有三の妥協しない姿勢が、叢書に協力した人々の能力を最大限に引き出し、質の高い画期的な児童書を世に送り出した。そして編集者・執筆者たちにとっても、時勢に屈せず「人類」の未来を展望した経験が、戦後の言論や著作活動の基盤の一つになったのではないかと考えられる。

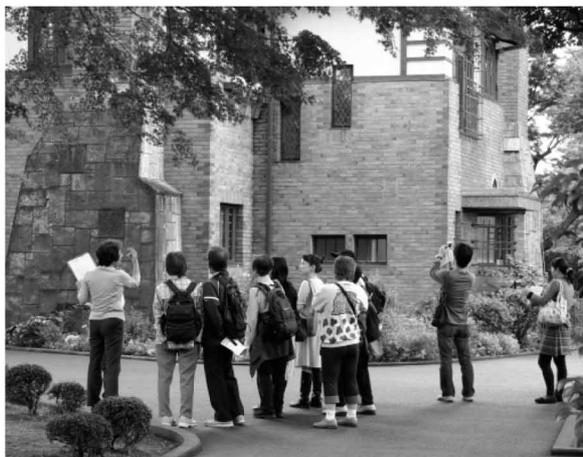
子ども向けの出版物は、文化の中で、ともすると軽視されがちである。しかし『日本少国民文庫』の成果は、次代のために真剣に考えて造られた児童書が、時代の制約を超えて人々の心に響き、社会に深く浸透することがあると教えてくれる。

《執筆者紹介》



久米依子(くめよりこ)
目白大学人間学部子ども学科教授。専門は日本近代文学。『文化の中のテキスト』(共編著 双文社出版)、『講座文学6 虚構の楽しみ』(共著 岩波書店)など。

山本有三記念館ボランティアレポート



ガイド風景

2008年の5月～6月にボランティア養成講座を開催し、現在28名のガイドボランティアが活動中です。今年1月には研修の一環として、当館と同時代に建てられた洋風建築の鳩山会館（旧鳩山一郎邸）見学会を実施しました。

土・日・祝日の午後1時から行っているボランティアガイドでは、展示解説だけでなく当館の隠れた見所やエピソードなどもご紹介しています。ガイドとの会話を楽しみながら、有三の生涯や作品について思いを馳せてみてはいかがでしょうか。事前申込みは必要ありませんので、お気軽に声をおかけ下さい。団体見学の方でガイドをご希望の場合は、事前にご相談下さい。

今年度の予定

●朗読コンサート

【日時】2009年7月11日（土）午後5時15分～6時

【会場】三鷹市山本有三記念館

【出演】野田香苗（朗読）、金子弘美（横笛）

【朗読作品】『心に太陽を持って』より 「唇に歌を持って」「油断」ほか

【応募方法】往復はがきに住所、氏名、電話番号、参加人数、返信用

はがきにも宛先をご記入の上、当館「朗読コンサート」係宛にお送り下さい。

※はがき1枚につき2名様までお申込み可。応募者多数の場合は抽選となります。

【応募〆切】2009年6月27日（土）当日消印有効

●次回企画展「山本有三記念館のすべて」（仮題）2009年10月3日（土）開催予定

●次号館報 2009年10月3日（土）発行予定

この他、山本有三作品朗読会や講演会も予定しております。



野田香苗
撮影：中村義政



金子弘美

●開館時間

午前9時30分～午後5時

●休館日

月曜日（月曜が休日の場合開館し、翌日と翌々日を休館）

●入館料

一般 300円

団体 200円（20名以上）

※中学生以下及び障害者手帳持参の方とその介助者は無料。校外学習の高校生と引率教諭は無料。

編集・発行

三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27

TEL 0422-42-6233 FAX 0422-41-9827

URL <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

書・籍・の・ご・案・内

○山本有三記念館が紹介されている近年発行の書籍

『首都圏 名建築に逢う』

東京新聞編集局編著／東京新聞出版局／2008年

『文学館への旅』

重里徹也著／毎日新聞社／2007年

『東京古き良き西洋館へ』

白石愷親文・塩沢慎写真／淡交社／2004年

『お屋敷拝見』

内田青蔵文・小野吉彦写真／河出書房新社／2003年

○現在発行されている『日本少国民文庫』

『心に太陽を持って』山本有三著／新潮文庫

『君たちはどう生きるか』吉野源三郎著／岩波文庫